

## オスカー・ワイルド——構成と背後

### Oscar Wilde — His Composition and Behind

木 村 克 彦

Perhaps, after all, America never has been discovered. I myself would say that it had merely been detected. <sup>(1)</sup>

結局、アメリカ大陸は決して発見などされなかったであろう。それは見破られただけである。

ワイルドは『ドリアン・グレイの肖像』においてこのように言う。

しかし、決して成功とは言えなかったアメリカ講演において、ワイルドは自分自身を発見したかの観がある。講演に関しては、ペーターからの影響がよく指摘されるが、はみ出した部分もあるからだ。

また、後のワイルドの傑作を予感させる言もある。

例えば、「イギリスの文芸復興」という講演において、次のように言う。

... Edgar Allan Poe's analysis of the workings of his own imagination in the creating of that supreme imaginative work which we know by the name of The Raven. <sup>(2)</sup>

『渡り鴉』という名で知られております、あの至高の想像力の詩を作るに際して自分自身の想像力の働きを分析したエドガー・アラン・ポー……

ワイルドはこのようにポーを称讃するが、この書き方から推測するに、ワイルドは、ポーの『詩の原理』や『構成の原理』に讃同を示したに相違ない。

Most writers — poets in especial — prefer having it understood that they compose by a species of fine frenzy — an ecstatic intuition ... In general, suggestions, having arisen pell-mell, are pursued and forgotten in a similar manner .... It is my design to render it manifest that no one point in its composition is referable either to accident or intuition — that the work proceeded, step by step, to its completion with the precision and rigid consequence of a mathematical problem. <sup>(3)</sup>

大体の作家、殊に詩人は、自分が一種の美しい狂気というか、忘我的直観で創作したと

思われたがるものだ……総じて連想は雑然とかんでくるものであって、同じく雑然と追っているうちに忘れてしまうものだ……『渡り鴉』の構成の一点たりとも偶然や直観には帰せられないこと、即ちこの作品が一步步進行し、数学の問題のような正確さと厳密な結果をもって完成されたものであることを明らかにしたいと思う。

ポーの提唱した論理は、ワイルドの創作に活かされたであろう。

ここでは、ワイルドの童話集『幸福な王子とそのほかの物語』に焦点を当ててみたい。

時の「流れ」により、全ては流れ去るのかもしれない。アイルランドの歴史も、ワイルドの体内を流れていたに相違ない。しかし、芸術家たるワイルドには、その流れを止める手段がひとつあった——それは「虚構」に他ならない。このことは、後に「嘘の衰退」に結実することとなる。

『幸福な王子とそのほかの物語』という「虚構」の世界を築きあげるにあたり、ワイルドは綿密な設計図を描いたに相違ない。しかもその設計図には隠し部屋まで含まれていた。

『幸福な王子とそのほかの物語』は、ワイルドの実質上の処女作と言って良い。実際には、大学時代に詩を書いていたものの、ワイルドの本格的な最初の作品となると、取り敢えず、『幸福な王子とそのほかの物語』を挙げて差し支えなかろう。

ワイルド研究者のなかでは、主人公、幸福な王子＝作者、オスカー・ワイルドという見方が、大方なされるであろう。

実際、作品の冒頭は、王子の次のような描写から始まる。

High above the city, on a tall column, stood the statue of the Happy Prince. He was gilded all over with thin leaves of fine gold, for eyes he had two bright sapphires, and a large red ruby glowed on his sword-hilt. <sup>(4)</sup>

街の空高く、高い円柱の上に、幸福な王子の像が立っていました。全身薄い金箔が着せてあり、目には2つの大きなきらきらしたサファイアが、また大きなルビーが刀の柄に輝いていました。

文字通り、王子は円柱の高みから、現実世界を見下ろしていたのである。……が、ここで念頭に置いておきたいことがある。

それは、アイルランドの愛国詩人、デニス・フロウレンス・マッカーシーの詩、「アイルランドの円柱塔」である。

The pillar towers of Ireland, how wondrously they stand  
By the lakes and rushing rivers through the valleys of our land;  
In mystic file, through the isle, they lift their heads sublime,  
These gray old pillar temples, these conquerors of time !<sup>(5)</sup>  
アイルランドの円柱塔、なんとすばらしく立っていることか  
われらの国の谷間の湖や奔流のほとりに。  
神秘的な列をなし、小島を通じて、荘重な頭を挙げる、  
これらの灰色の古い円柱の寺々は——これらの時の征服者たちは！

ここで、マッカーシーは、アイルランドそのものを「円柱」に喩えているのだ。ワイルドは、『幸福な王子とそのほかの物語』の出版に先立つこと6年前、アメリカでもとりわけアイルランド出身者の多かったサンフランシスコにおける講演で、この詩を紹介、朗読しているのである。

即ち、アイルランドという円柱にも喩うべき高みから、ワイルドは現世を眺めんとしたに相違ない。その根底に、この詩があったとしても、不思議ではあるまい。

また、王子は宮廷のなかにいた頃は、世界を知らなかったとして、つばめに向かって、次のように言う。

My courtiers called me the Happy Prince, and happy indeed I was, if pleasure be happiness .... And now that I am dead they have set me up here so high that I can see all the ugliness and all the misery of my city....<sup>(6)</sup>  
廷臣たちは、私を幸福な王子と呼んだし、私も実際、幸福だったのだ、もし快楽が幸福であるとしたらね。……ところが死んでしまうと、みんなは私をこんな高いところに立てたものだから、私の街の醜さとみじめさが、すっかり見えてしまうのだ。

「美」に最高の価値を置き、唯美主義を標榜したワイルドであったが、この王子と同様、「この世は美のみならず」ということも、分かっていたと言い得る。そもそもワイルドはアイルランド出身である。作中に登場する「貧しい人々」は、もしかすると、アイルランドがワイルドの念頭にあったのかもしれない。ゆえに、マッカーシーのひそみに倣い円柱という高みに登ったのは、アイルランドという素顔を隠し仮面を付けたワイルドかもしれない。

また、「幸福な王子」を再読して気付いた点があるので、ここで記しておきたい。

まず、王子はつばめを使者として、貧しい人々に、自らの体の一部をはがして分け与え

るわけだが、最初に、ルビーを与えることとなった貧しいお針子は、丁度、ある衣装に「時計草」の刺繍を施している最中であつた。

時計草とは、花の雄蕊雌蕊の部分が時計の2本の針を連想させるゆえ、その名があるわけだが、もうひとつ、その雄蕊雌蕊は「十字架」を連想させるという見方もある。この十字架は、王子とつばめの死を暗示していると、言えなくもないであろう。

次に王子は、やはり、つばめを使者として、作家志望の青年にサファイアを分け与えるが、この青年の机上の花瓶には、しおれた堇の花が差してある。

「堇の花」は、シェイクスピアの『ハムレット』においてレアティーズが入水したオフィーリアに向かって語る台詞のなかに見い出される。

Lay her i' th' earth;  
And from her fair and unpolluted flesh  
May violets spring! <sup>(7)</sup>

オフィーリアに土をばかけよ、  
美しく汚れのない肉体から、  
堇が咲き出でますように！

この一節は、先に挙げたペーターも『ルネサンス』のなかで、『ハムレット』からとは断らないまでも、引用しているので、ワイルドも、『ハムレット』を意識して用いたのではないかと推測される。即ち、堇の花も登場人物の「死」を暗示していると言えるのではないか。

また最後に王子は、マッチ売りの少女に金箔を分け与えるのであるが、マッチ売りの少女は、言うまでもなくアンデルセンの童話から取られたものである。『マッチ売りの少女』は、1848年に発表されているのでワイルドが生まれる6年前の作品ということになる。ちなみに、『マッチ売りの少女』に登場する「少女」のモデルは、アンデルセンの母親であつたらしい。

アンデルセンの『マッチ売りの少女』では、少女は死して天国に召されるが、これも、王子とつばめの行く末を暗示していると言えよう。

ワイルドは、「幸福な王子」の結末への伏線として、「時計草」、「堇の花」、「マッチ売りの少女」を、登場させたものと思われる。

またこれは、ポーの『構成の原理』に基づいてのことと思われる。前掲のように、ポーは、文学作品はインスピレーションの湧くままに書くのではなく、まず綿密な設計図を書くべきだと主張していたのである。ワイルドもこの方法に従ったものと思われる。

また、「幸福な王子」冒頭近くで、慈善院から出てくる子供たちの様子が、次のように描かれている。

“He looks just an angel,” said the Charity Children as they came out of the cathedral in their bright scarlet cloaks and their clean white pinafores.

“How do you know?” said the Mathematical Master, “you have never seen one.”

“Ah! But we have, in our dreams,” answered the children;...<sup>(8)</sup>

「天使そっくりだね」と、鮮やかな真紅の外套を着て、きれいな白いエプロンをかけ大会堂から出てきた慈善学校の児童たちが言いました。

「どうしてそれが分かる」と数学の先生が言いました、「天使なんか見たこともないくせに」

「ああ！でも見たことはあるんです、夢のなかで」と児童たちは答えました。

この場面に限らず、ワイルドの童話には、子供の方が大人よりも、はるかに立派で美しく描かれている。そもそも「幸福な王子」であって、「幸福な王様」ではない。

また同じ『幸福な王子とそのほかの物語』に収められている「わがままな大男」では、この傾向が一層、推し進められている。「わがままな大男」の主人公、わがままな大男は、堀の穴から庭に入り込んだ「小さな坊や」の振る舞いを見て、自分の利己心に気付くのである。

これは、ワイルド自身、実は意識して書いたものであった。後年、『獄中記』において、述懐する。

He (Christ) took children as the type of what people should try to become. He held them up as examples to their elders, which I myself have always thought the chief use of children;...<sup>(9)</sup>

キリストは、子供を、人々が成るべき見本として呈示した。キリストは、子供を大人の見本として押し立てたが、これこそ私が、常々、子供の効用と考えて来たものであった  
.....

即ち、通常の大人数子供といった判断を、別な視点から眺めて見せたわけである。

実際、「幸福な王子」においても、子供と対比されて皮肉られているのは、俗物的な大人たちである。

例を拾うと、先程、引用した「数学の先生」、他には「市長」や「市会議員」、「鳥類学の教授」、「大学の美術の教授」等である。

これら俗物たちは、『幸福な王子とそのほかの物語』が出版された1888年、ヴィクトリア朝時代の産物を象徴するかのよう描かれている。

ヴィクトリア朝は、ヴィクトリア女王の治世、即ち、1837年から1901年までを指す。

大まかに言うと、その時代の風潮は、「偽善的な道徳」、「上品ぶること」、「因習にとら

われること」、「俗物的」などといった特徴が挙げられる。

このことは、弱冠18歳で即位したヴィクトリア女王の夫として選ばれたアルバート公の影響も皆無ではないと思われる。アルバート公はドイツのザクセン・コーグル・ゴータの公子であった。アルバート公には、ドイツ的な勤勉さと道徳的厳正さがあり、これは、女王との家庭生活においても貫かれていた。アルバート公は、「義務」、「勤勉」、「道徳」、「家族」に重きを置いたのである。ヴィクトリア女王は、アルバート公の没後も、40年に渡って、その姿勢を貫いたのである。

ヴィクトリア朝の真ただ中に、アイルランドからやって来たワイルドは、別な視点からヴィクトリアニズムを見渡したに相違ない。

ヴィクトリアニズムにどっぷり浸かり、その只中にあっては、ヴィクトリアニズムは見えないのかもしれない。

ワイルドは、少なくともヴィクトリア朝の偽善的な道徳には、反発を示した。

ある「流れ」なるものがあると、まずはその流れに乗る者が多いが、必ず反発する者が現れる。殆んどアンチテーゼと言っても良い。例えば、フロイトの後継者等はその典型的な例である。

ワイルドの喜劇『ウィンダミア卿夫人の扇』におけるダーリントン卿の台詞に次のようなものがある。

Oh, nowadays so many conceited people go about Society pretending to be good, that I think it shows rather a sweet and modest disposition to pretend to be bad. <sup>(10)</sup>

近頃は、善人ぶった自惚れ屋が大勢、社交界をうろついているので、悪人ぶることが、しとやかで奥ゆかしい性質を示すのです。

皮肉の込められた台詞であるが、特に「悪人ぶること」というところが、ヴィクトリアニズムの偽善的な道徳への反発であろう。ワイルドは、「若者のための警句と哲学」においても、次のように言う。

Dullness is the coming of age of seriousness. <sup>(11)</sup>

愚鈍なるものは、真面目な時代の産物である。

即ち、時代精神はどの時代においても、反発する者を生み、それがその時代の隠された一面なのである。

ワイルドは、『獄中記』において、自らと時代との関係について、次のように述べていた。

I was a man who stood in symbolic relations to the art and culture of my age. <sup>(12)</sup>

私は、私の時代と文化を象徴する立場にあった人間だった。

このように、「時代の象徴」であったと述べてはいるが、これはあくまで一面においてであった。ワイルドは時代の「偽善」や「道徳」を象徴していたわけではない。むしろ、それらの裏面を象徴していたかの観がある。

英文学者の矢本貞幹は、ヴィクトリア朝の風潮を次のように言う。

ヴィクトリア朝後期の人心はひどく弛緩していたようである。長年続く平和な生活に慣れ、植民地から獲得する富は増加し、機械文明が進歩したので、都会には安易と享樂の気分が漲っていた。<sup>(13)</sup>

即ちワイルドは、ヴィクトリア朝の「享樂」やら「退廃」といったもの——ヴィクトリア朝の裏面を象徴していたと言える。

また、矢本貞幹の言を引いたところで言及しておきたいのだが、ワイルドの「わがままな大男」の主人公、わがままな大男を、山田勝は、『世紀末とダンディズム』において次のように言う。

『わがままな巨人』では、ヴィクトリア時代の巨大な大英帝国の営利主義を「巨人」にたとえ……<sup>(14)</sup>

そうかもしれない。つまり山田勝の説は、矢本貞幹の「長年続く平和な生活」や「植民地から獲得する富の増加」あたりと繋がるわけであろう。

さて、「幸福な王子」であるが、この作品においては未だ、ワイルドの享樂主義、快樂主義は、あまり表立って表明されてはいない。が、それを仄めかす部分はある。それは王子が、宮殿のなかにいた頃を、回想する言葉に込められているように思う。

“When I was alive and had a human heart,... I did not know what tears were, for I lived in the Palace of Sans-Souci, where sorrow is not allowed to enter .... My courtiers called me the Happy Prince, and happy indeed I was, if pleasure be happiness ....” <sup>(15)</sup>

私が生きて人間の心を持っていた頃は、涙とはどんなものか知らなかった。無憂宮に住んでいたからで、そこへは悲しみが入ることが許されていないのだ。……廷臣たちは私を幸福な王子と呼んだし、私も実際幸福であったのだ、もし快樂が幸福であるとしたらね。



即ち、「幸福な王子」における宮殿のなかの快樂生活は、作者ワイルドの快樂主義を暗示していると言える。実際、妻コンスタンスとの家庭生活は殆んど顧みず、同性愛へと走るワイルドの姿は、リチャード・エルマンの著書『オスカー・ワイルド』において、繰り返し述べられている。特に、ひとり取り残されたコンスタンスの様子は印象的だ——ワイルドは明らかに幸福よりも快樂を優先させた。ワイルドの「若者のための警句と哲学」には、次のようなやや危険な言葉がある。

Pleasure is the only thing that one should live for. Nothing ages like happiness. <sup>(16)</sup>

人は快樂のためにのみ生きるべきだ。幸福ほど歳をとるものはない。

ワイルドが、明らかな快樂主義者を主人公とするには、『ドリアン・グレイの肖像』や『サロメ』を俟たなければならない。

では、「幸福な王子」に「道德」は見て取れるであろうか。既に述べたように、王子は高い柱の上に上がることにより、この世を鳥瞰した。ペーター流に言うなら取り敢えずは「観照」したと言える。しかし、王子は、あたかも実物のワイルドさながら、ある意味で観照の生活に飽き足らず、つばめを使徒として自らを犠牲にすることにより、慈善活動を行う。

この自らを犠牲にすること——「幸福な王子」においては、それは完全な自己犠牲と言えるわけで、そこには「偽善」との誹りを受ける隙はないのである。

また、完全な自己犠牲によって、教訓を得る者がいるとすれば、その最たるものは、私たち読者であろう。「幸福な王子」には、このようなモラルが読み取れるのである。

また、王子の献身は、結末において報われることとなる。高い柱の王子の視点を更に越えた高みから、神が一部始終を見ていたのである。神は天使に言う。

“Bring me the two most precious things in the city,” said God to one of His Angels; and the Angel brought Him the leaden heart and the dead bird.

“You have rightly chosen,” said the God, “for in my garden of Paradise this little bird shall sing for evermore, and in my city of gold the Happy Prince shall praise me.” <sup>(17)</sup>

「街じゅうで一番貴いものを二つ持って来なさい」と神さまが天使のひとりに言われました。そこで天使は鉛の心臓と死んだ小鳥を神さまのところへ持っていきました。

「お前の選択は正しかった」と神さまは言われました。「天国の私の庭で、この小鳥が永遠に歌い続けるようにし、私の黄金の街で、幸福な王子が私を褒めたたえるようにするつもりだから」



この結末は、極めて道徳的なものと言えよう。即ち、ワイルドはヴィクトリア朝の道徳的な側面と、後に『サロメ』や『ドリアン・グレイの肖像』に見られるような退廃的な側面とを併せ持っていたのである。……即ちワイルドは、身をもって、その逆もまた真なりという逆説家の視点を、作品に込めたとも言える。ワイルドの快樂主義的な一面、退廃的な一面は、ヴィクトリアニズム後期のそれに、どっぷり浸かっていたと言える。この点では、ワイルドのアイルランド出身ゆえの別な視点から時代の風潮を見て取るという特色は見られない。

さて、では更に道徳的な側面について、もう少し考察してみたい。

まず、ワイルドが一段高い視点から眺めることで、その本質を風刺したのは、「幸福な王子」で言えば、大学教授やら、政治家やらの俗物たちである。

例えば、鳥類学の教授は、次のように皮肉られている。

“What a remarkable phenomenon !” said the Professor of Ornithology as he was passing over the bridge. “A swallow in winter !” And he wrote a long letter about it to the local newspaper. Every one quoted it, it was full of so many words that they could not understand it. <sup>(18)</sup>

「なんと驚くべき現象だ」と鳥類学の教授が、橋を渡りながら言いました。「冬のつばめとは！」そして教授はこれに関して長い手紙を地方新聞に寄せました。誰もがそれを引用しましたが、つまりその手紙には意味の分からない言葉がいっぱい詰まっていたのです。

ここには、やや深読みすれば、俗物どもの「権威」への皮肉が読み取れるかもしれない。……なんであれ、「教授」の書いたものであれば、ありがたられ、すぐに新聞に載り、訳の分からないまま、大勢の人に引用されるのだ……真実は俗物たちには見えないところに隠されているにも関わらず。

即ち、ワイルドは、ヴィクトリア朝の俗物主義には、距離を置き、繰り返すが、王子やつばめの献身的な自己犠牲を通して、極めて道徳的な結末を付けたのである。また、結末だけを見れば「わがままな大男」における大男も、最期には改心し「小さな坊や」によって天国に導かれるのである。この結末も道徳的である。この2作の結末でワイルドは、ヴィクトリア朝の道德観を反映させたのかもしれない……ただし、ここで傾注すべきことがある。『幸福な王子とそのほかの物語』のなかの一作、「小夜鳴鳥とばら」という作品の存在である。

ワイルドは『幸福な王子とそのほかの物語』の出版にあたり、「幸福な王子」および「わがままな大男」に加えて、「小夜鳴鳥とばら」を意図的に並べて出版したと思えてならない。

既に何度も言及したように、「幸福な王子」と「わがままな大男」においては、主人公がある時、一段高い視点を与えられ、それまで見えていなかったものが見えるようになる。わがままな大男の場合は、ある時、間違っただけで侵入した「小さな坊や」が部分的にでも大男の庭に「春」をもたらしてくれた光景を観て、自分の利己心に気付くのである。

また両作とも、「小さな坊や」、「王子」、「つばめ」の完全な自己犠牲によって、一応のハッピー・エンディングという結末を迎えることができる。

さて、そこで、「小夜鳴鳥とばら」であるが、ここでも、ある学生が、好きな女性に気に入ってもらうためだけに、赤いばらを欲しがらる俗物として描かれている。この学生はばらの美しさそのものには関心がないのである。

この俗物学生の悩みを、ある時、小夜鳴鳥が察知し、学生のために赤いばらを創り出すのである。

ただしここでも、小夜鳴鳥の自己犠牲が前提となる。

赤いばらではなかったために、小夜鳴鳥は、次のような取り引きを、白ばらとするのである。白ばらは言う。

“If you want a red rose,” said the Tree, “you must build it out of music by moonlight, and stain it with your own heart's-blood. You must sing to me with your breast against a thorn. All night long you must sing to me, and the thorn must pierce your heart, and your life-blood must flow into my veins, and become mine.”<sup>(19)</sup>

「赤いばらが欲しければ、月明かりの中で音楽からそれを作り出して、あなた自身の胸の血でもって染めなければならない。棘に胸を押し付けて私に唄ってくれなければいけないし、棘があなたの心臓を突き刺さなければならず、あなたの生き血が私の葉脈のなかへ流れ込んで、私のものにならねばならないのだ」

これに対し、小夜鳴鳥は、「命は大きな代償です」としながらも、自らの心臓にばらの棘を突き刺し、一晩唄い続ける決心をする——そして、翌朝、白ばらを真紅に染め上げ命を落とすのである——即ち、この点、完全な自己犠牲であり、「小さな坊や」や「王子」と同様である。

ところが、赤いばらは、学生によって、想いを伝えるべく、かの女性の元に届けられるが、学生は結局、その女性から袖にされ、赤いばらは溝に投げ捨てられてしまうのである。

“You said that you would dance with me if I brought you a red rose.” cried the Student ...  
But the girl frowned.

“I am afraid it will not go with my dress,” she answered; “and, besides, the

Chamberlain's nephew has sent me some real jewels, and everybody knows that jewels cost far more than flowers."

"Well, upon my word, you are very ungrateful," said the Students angrily; and he threw the rose into the street, where it fell into the gutter, and a cartwheel went over it.<sup>(20)</sup>

「赤いばらを持って来たら、僕と踊ってあげるとおっしゃいましたね」と学生は叫びました。……しかし、少女は眉をひそめました。

「このばらは私のドレスに似合わないと思いますわ」と少女は答えました。「それに、侍従の甥御様が本物の宝石をいくつか送って下さいましたし、宝石の方が花よりもずっと高価なことは誰でも知っていますものね」

「いや、それは心外な、あなたは恩知らずだ」と学生は怒って言いました。そして、そのばらを通りへ投げ捨てると、ばらは溝に落ちて、荷車の車輪にひかれてしまいました。

主人公の「死」によって結末を迎える点は「幸福な王子」や「わがままな大男」と同様であるが、この「小夜鳴鳥とばら」では、小夜鳴鳥が天国へ昇る姿は描かれていない。ワイルドは意図的にそれを省いたのであろうか。だとすれば何ゆえに……

これは、善行を施した者が、必ずしも報われるわけではないという、この現世の実相が、ワイルドには見えていたからに他ならない。善い行いが報われればそれは理に適ったことではあるが、現実世界は理に則って動くわけではない。ワイルドが、結末が対照的な童話を並べて、一冊の童話集としたのは、このような意図があったように思えてならない……即ち、この世に常なるものはない。

なぜ、アイソラが8歳で旅立たねばならなかったのか。

#### Notes;

- (1) Wilde, Oscar. *The Picture of Dorian Gray. The Complete Works of Oscar Wilde*. Collins, 1983.
- (2) Wilde, Oscar. "The English Renaissance". *The Collected Works of Oscar Wilde*. Routledge & Thoemmes Press, Kinokuniya Company Ltd. 1993. 255.
- (3) Poe, Edgar. *The Philosophy of Composition*. Fyfield Books, 1995. 138.
- (4) Wilde, Oscar. "The Happy Prince" *The Happy Prince and Other Tales. The Complete Works of Oscar Wilde*. Collins, 1983. 285.
- (5) Project Gutenberg. <http://www.gutenberg.org/files/12622/12622-h/12622-h.htm#p019> (最終閲覧日: 2014年10月17日)
- (6) "The Happy Prince" 286.
- (7) Shakespeare, William. *Hamlet The Complete Works of William Shakespear*. Collins. 1985. 1067.
- (8) "The Happy Prince" 285.
- (9) Wilde, Oscar. *De Profundis. The Complete Works of Oscar Wilde*. Collins, 1983. 937.
- (10) Wilde, Oscar. *A Woman of No Importance. The Complete Works of Oscar Wilde*. Collins, 1983. 475.
- (11) Wilde, Oscar. "Phrases and Philosophies for the Use of the Young" *The Complete Works of Oscar Wilde*. Collins, 1983. 1205.

- (12) *De Profundis* 912.
- (13) 矢本貞幹『現代イギリス批評の先駆』研究社、1955年、158頁。
- (14) 山田勝『世紀末とダンディズム』創元社、1983年、261頁。
- (15) “The Happy Prince” 286.
- (16) “Phrases and Philosophies for the Use of the Young” 1205.
- (17) “The Happy Prince” 291.
- (18) “The Happy Prince” 288.
- (19) Wilde, Oscar. “The Nightingale and the Rose” *The Happy Prince and Other Tales. The Complete Works of Oscar Wilde*. Collins, 1983. 293.
- (20) “The Nightingale and the Rose” 295-6.